

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2013～2016

課題番号：25284142

研究課題名（和文）20世紀オーストリアにおける地域社会の変動と国民意識の再編

研究課題名（英文）Transformation of Regional Societies in the 20th Century Austria and Reorganization of National Consciousness

研究代表者

小澤 弘明（OZAWA, Hiroaki）

千葉大学・国際教養学部・教授

研究者番号：20211823

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 11,400,000円

研究成果の概要（和文）：従来、ハプスブルク帝国の崩壊からドイツ第三帝国への編入に至る20世紀前半の歴史的経験から、オーストリア国民意識の形成については、ドイツからの自立の側面が強調されてきた。本研究では、「国民に対する無関心」など、新しい研究動向を考慮に入れながら、オーストリア国民意識を支えるべき地域社会が必ずしも国民意識の形成に寄与していないことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：From the historical experience in the first half of the 20th century, from the collapse of the Habsburg Monarchy to the incorporation into the Third Reich, we have emphasized several aspects of independence from Germany on the formation of the Austrian national consciousness. In this study, we made clear that the regional societies that should support Austrian national consciousness does not necessarily contribute to the formation of Austrian nation, taking into consideration new research trends such as "Indifference to nation".

研究分野：人文学

キーワード：オーストリア国民 ナショナリズム 国民意識 地域主義

1. 研究開始当初の背景

(1) オーストリア国民の形成に関する従来の研究は、1938年のドイツへの併合を否定し、ドイツと異なるオーストリア国民を形成するという第二共和国の正統性を歴史に投影したものであった。冷戦下の永世中立という国際環境に加え、安定した連合政治と社会パートナーシップを背景として、オーストリア国民は1980年代半ばまでには国民意識として確立したと言ってよい。

(2) しかし、1986年のヴァルトハイム事件と自由党のハイダー党首の就任によって、オーストリア国民なるものがオーストリアの歴史政策の所産であることが露わとなり、戦後オーストリアの経歴詐称が問題となるようになった。オーストリア側からの併合(内からの併合)が問題とされ、土着のファシズム、ナチズムをはじめオーストリアの加害者としての側面、戦後社会国家の形成にあたっての第三帝国の受益者としての側面などが次々と明らかにされるようになった。しかし、その場合にもオーストリア国民そのものの存在は自明の前提であり、新しい研究動向もオーストリア史の中に回収される傾向にあった。

2. 研究の目的

(1) そこで、本研究の目的は20世紀オーストリアの境界領域に焦点をあて、オーストリア国民の形成に直結しない動向に注目し、地域社会の変動とオーストリア国民形成との矛盾・軋轢・対抗の側面を明らかにすることを目的とした。

(2) 特に東部のクロアチア系住民、ハンガリー系住民、南部のスロヴェニア系住民、西部のイタリア系住民、首都ウィーンの旧ユーゴスラヴィア、トルコからの外国人労働者に着目し、それらの人びとの主体形成とオーストリア国民形成との関係を解明することによって、従来の研究動向とは異なり、オースト

リア国民の「ドイツ性」を主張することにした。

(3) これに加え、こうした研究をオーストリアという事例についてのケーススタディにとどめることなく、比較国民国家史、比較地域社会史という形態で他地域の分析枠組みに資する理論形成への展望を拓くことが第三の目的である。

3. 研究の方法

(1) 研究方法の第一は、各地域の問題を言語や文化といった文化主義的アプローチではなく、現実の市場の再編成や労働市場の転換によって地域観念が変化する側面、地域社会と国民経済との関係が国民意識を形成・再形成していく側面に着目した。

(2) 特に本研究が地域社会を対象とすることから、地域の重層性を社会や生活世界のレベルで解明すべく、地域研究とフィールドワークを通じた地域社会の実態の解明にまずは注力することにした。実地調査を行った地域は、ブルゲンラント、シュタイアーマルク、ケルンテン、ティロール、フォアアールベルク、ウィーンの諸州である。ウィーンでは10区ファヴォリーテンと16区オッタクリングを集中的に調査した。

(3) 実際の研究においては、人の移動の様態を文献上跡付けるだけでなく、生業や労働市場の分析を通じて、マクロな動態を把握するようつとめた。

4. 研究成果

地域ごとに得られた成果をまず記述し、ついで理論的な問題について述べることとする。

(1) ブルゲンラントでは、二つの研究成果が得られた。第一に、1921年に行われたショプロンの住民投票の分析を通じて、ブルゲンラントの地域概念の形成がショプロンのハンガリーへの帰属を通じて、帝制期の西ハンガ

リーという地域概念とは異なるものとして成立したこと、また、ブルゲンラントの形成過程がトリアノン条約体制下のハンガリー国民概念の形成（トリアノン・ハンガリー）と対抗的に進むものと観念されたことが明らかとなった。ブルゲンラントでは、民法や婚姻法の規定において当面、一国二制度が維持されたものの、第三帝国の下でオーストリア＝ドイツに法体系の面でも一面化されていくことによって、ブルゲンラントのオーストリア＝ドイツ化が進められた。史的には、ショプロンで発行されているドイツ語新聞も電子的に利用できるようになった。第二に、ブルゲンラント・クロアチア人については主として生活世界を支える結社の分析から研究を開始した。ザグレブを中心とするクロアチア国民概念とユーゴスラヴ（南スラヴ）国民概念の重層性に加えて、当地ではブルゲンラント・クロアチア人という独自のアイデンティティが形成され、こうした人びとがウィーンやヴィーナー・ノイシュタットという工業都市にペンドラー（通勤者）という形態で移動することを通じて、オーストリア国民概念と交錯するという複合的な関係性にあることが明らかとなった。

(2)シュタイアーマルク、ケルンテンでは、第一に、第一次世界大戦後に成立したセルビア・クロアチア・スロヴェニア王国(後のユーゴスラヴィア)との境界領域に居住するスロヴェニア系住民の結社とドイツ系住民の結社(特に南部辺境協会など農業改良運動に立脚する組織)の対抗関係を通じて、土地や農業資源を巡る現実の対立関係のあり方を分析した。第二に、この地域で形成されたヴィンディッシュ理論を通じて、ドイツ人对スロヴェニア人という二項対立の図式では理解できない問題を明らかにした。ヴィンディッシュ理論は、ドイツ国民主義・ドイツ自由主義の側から持ち出されたもので、スロヴェニア系住民の中で「ドイツ人と感じ始めた」

人びとで、私的領域でしかスロヴェニア語を話さず、子どもの世代にスロヴェニア語を伝えない者たちを Windisch と呼ぶようになったものである。つまり、ドイツ化と文明化を等置し、ドイツ化しつつある人びとが Windisch だとするものであった。ここから、ヴィンディッシュは標準スロヴェニア語(文語)とは異なる、独自の言語だという主張もあらわれてくる。このような存在とそれに対する「名付け」のもつ政治的意味は、国勢調査など統計にも表現されていくことになる。

(3)ティロールでは、従来から存在するイタリアとの「南ティロール」問題を明らかにする作業を行った。ここでは、Digitale Bibliothek, Digitales Zeitungsarchiv Landesbibliothek Dr. Friedrich Tessimann というデジタルライブラリーが利用可能となっている。これによって、南ティロールの同時代文献や新聞・雑誌史料を利用して外交史とは異なるアプローチをとることが可能となった。これに加え、南ティロール問題を従来とは全く異なる視角から分析するために、20世紀末から21世紀にかけて急増しているバルカンやアフリカからの労働者の分析を行った。彼ら・彼女らは、季節労働者として南ティロールに来ており、主として観光業や農業に従事している。他に非熟練の工業労働者やサービス産業の労働者になっており、家事労働や高齢者介護を担う割合も高く、単身の労働者ではなく、家族を伴っている点が特徴的である。そのため、出生率も上昇し、年齢構成も地元住民より低くなっているのは、労働人口であることから当然と言える。さらに、労働市場のあり方との関連で、男性よりも女性が多い。外国籍住民の12.5%はアルバニア人、8%はモロッコ人である。ここから、南ティロール問題をオーストリア＝ドイツとイタリアという二項対立的図式で把握することはもはやできず、ティロールの郷

党主義が、むしろ反アルバニア人、反モロッコ人という性格を帯びる事態となっている。

(4) フォアアールベルクでは繊維産業の産業史の分析を通じて、スイスやドイツとの資本関係、労働市場の形成の解明につとめた。その結果、西部地域におけるスイスとの合邦構想の背景にはこのような市場の関係があり、1930年代のナチズムの浸透もドイツ資本との関係に規定される側面が強いことが明らかとなった。このような資本や労働市場の関係は、オーストリアのEU加盟とともに、再編の途上にあり、オーストリア国民経済の規定力をどのようなものとするかが検討課題として残った。

(5) ウィーンについては、20世紀前半はボヘミアから移住してきたチェコ系住民がウィーンの外国人のほとんどを占めていた。10区ファヴォリーテンと16区オッタクリングはその集住地域であり、特にファヴォリーテンではヴィーナーベルク煉瓦工場などチェコ人労働者が従事する労働集約的工場が立地していた。また、チェコ系の学校、結社等も集中し、戦間期の労働者文化運動の中心ともなった。第二次世界大戦後は、チェコ系住民が同化するのと入れ替わりに、旧ユーゴスラヴィア、トルコからの外国人労働者(ガストアルバイターGastarbeiter)が同じ10区、16区などに集住し、1980年代までは労働市場の「最底辺」を構成するとともに、カトリック国家オーストリアの反イスラム主義・イスラム恐怖症 Islamophobia の対象ともなった。こうした外国人労働者が世代を重ね、一部は社会的上昇を遂げて、もはや「最底辺」とは言えなくなった。この代わりに、ウィーンではアフリカ系労働者が増加した。2006年時点で、国籍を取得したアフリカ系オーストリア人の4分の3が大学入学資格(Matura)を有し、3分の1は大卒である。こうした高学歴者は、労働市場においては現在のところ非熟練の仕事に従事している。ここでも労働市場

のセグメント化がアフリカ系住民の生活世界を規定している。

(6) こうした地域研究の成果を通じて明らかとなったのは以下の諸点である。第一に、オーストリア国民は「ドイツ国民とは異なる」という特徴を有していたが、地域社会の少数派に対しては「ドイツ国民」として立ち現れ、対峙すること、したがって、第二に、地域社会の複合的アイデンティティはオーストリア国民 = ドイツ国民の形成に直結することはなく、逆にオーストリア国民形成にはしばしば冷淡であること、第三に、政治的に上から形成されたオーストリア国民を地域社会から再構成し、下からオーストリア国民を作り上げようとする試みは、かえって地域社会の複合的アイデンティティを一元化する作用を果たすこと、しかし、第四に、こうした複合的で相互に軋轢を抱えたアイデンティティは、EU国民というより上位の枠組みによって保全されることもあり、同時に外国人労働者や難民の大量流入が、オーストリア国民 = ドイツ国民の方向へ舵を切ることによって社会国家における受益者としての地位を保全しようとする動きを強化することにもつながること、である。こうして、外部をつねに内部化しつつ、新たな外部を作り出し続けるというのが、現代国民国家の機能となっているのである。この点は、ポピュリズムを基軸としてヨーロッパの現代社会を比較分析する視点につなげることができよう。

(7) 理論的には「国民への無関心」というアメリカ合衆国の歴史学において形成されつつある視角が、本研究にとっても有益である。同時に新自由主義時代における新たな地域社会の再編過程や、「国民競争国家」「市場国家」としての現代国民国家の再編過程が地域観念や国民意識の形成に及ぼす影響について引き続き検討することが必要であることが明らかとなっている。

(8) 本研究は連続研究会を開催することによ

つてのべ 18 本の報告を得、2015 年 12 月の現代史研究会例会においてもセッションを設けて研究活動を行った。また、研究リソースについては科研メンバー用のブログを作成して、文書館・図書館・博物館・研究文献・同時代文献の情報について共有した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 10 件)

小澤 弘明、「新自由主義時代の歴史学—下からのグローバルヒストリーについて」、『歴史科学』、査読有、226 号、2017、3-16

水野 博子、「青いウィーン」、『季刊 明治』、査読無、69 巻、2016、36-17

水野 博子、「消防団の戦争—第一次世界大戦期オーストリアの経験と遺産」、『駿台史学』、査読有、154 巻、2015、113-145

古川 高子、「大衆政治化期オーストリアにおけるリベラル・ツーリズムの展開—アルペン協会と自然の友の関係を中心に」、『東欧史研究』、査読有、36 号、2014、305-317

[学会発表](計 14 件)

水野 博子、「オーストリア国民の境界とマイノリティ—ブルゲンラント・ロマを例に」、『駿台史学会大会シンポジウム、2015 年 12 月 5 日、明治大学(東京都・千代田区)

SUZUKI Tamami, "The Options Agreement"(1939) in South Tyrol and the Reaction of Local Inhabitants, International Workshop "Boundary Demarcation and Local Politics in the 19-20 Centuries in Alpen-Adriatic Borderland", March 11 2016, Florence(Italy)

FURUKAWA Takako, Continuity between Liberalism and Nationalism in Interwar Austria from the Viewpoint of Alpine-Tourism, International Workshop "Boundary Demarcation and Local Politics in the 19-20 Centuries in Alpen-Adriatic Borderland", March 11 2016, Florence(Italy)

FUJII Yoshiko, Liberalism for German

Farmers in Lower Styria at the End of the 19th Century: In the Case of the Bauernverein Umgebung Marburg, International Workshop "Boundary Demarcation and Local Politics in the 19-20 Centuries in Alpen-Adriatic Borderland", March 11 2016, Florence(Italy)

[図書](計 13 件)

沢山 美果子、橋本 伸也、江口 布由子 他 10 名、『保護と遺棄の子ども史』、昭和堂、2014、336(153-181)

小澤 弘明、山本 明代、秋山 晋吾 編著 姉川 雄大 他 6 名、『つながりと権力の世界史』、彩流社、2014、280(9-21、93-114)

大津留 厚、水野 博子、河野 淳、岩崎 周一 編著、江口 布由子、鈴木 珠美、藤井 欣子、古川 高子、山崎 信一 他 24 名、『ハプスブルク史研究入門—歴史のラビリンスへの招待』、昭和堂、2013、311(163-167、187-204、205-207、217-226、227-238、239-241)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小澤 弘明 (OZAWA, Hiroaki)
千葉大学・国際教養学部・教授
研究者番号：20211823

(2) 研究分担者

姉川 雄大 (ANEGAWA, Yudai)
千葉大学・アカデミック・リンク・センター・特任助教
研究者番号：00554304

水野 博子 (MIZUNO, Hiroko)
明治大学・文学部・准教授
研究者番号：20335392

江口 布由子 (EGUCHI, Fuyuko)
高知工業高等専門学校・ソーシャルデザイン工学科・准教授
研究者番号：20531619

鈴木 珠美 (SUZUKI, Tamami)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・研究員
研究者番号：20641236

古川 高子 (FURUKAWA, Takako)
東京外国語大学・世界言語社会教育センター・助教

研究者番号：90463926

山崎 信一 (YAMAZAKI, Shinichi)
東京外国語大学・大学院総合国際学研
院・研究員
研究者番号：80376582

藤井 欣子 (FUJII, Yoshiko)
東京外国語大学・大学院総合国際学研
院・研究員
研究者番号：30643168